

共存共栄の 古橋林業のこれまでとこれから

江戸後期の天保の飢饉の際に、古橋家6代当主の古橋源六郎^{てるのり}は村民を飢えから救うために奔走するとともに、将来の外貨獲得の手段として林業を志しました。村民にも地域の共有山への植林を奨励し、自らも大井平山に植林をして模範を示しました。

今では紅葉の名所となった大井平公園の巨木の森は、天保の飢饉がきっかけで生まれた、愛知県内最古の人工林の一つであり、古橋林業の「共存共栄」の精神を象徴する山林です。



暉兒が植林した巨木の森(大井平公園)

明治期になると、今から100年以上前に、100年後の森づくりを構想した「百年計画の植樹法」を地域とともに樹立して、稲武地区の各村の共有山への植林を規約として取りまとめました。

戦後は、名古屋大学の演習林(現名古屋大学大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター稲武フィールド)の開設にも尽力しました。

暉兒が夢見た林業は、太平洋戦争後の一時期に実を結び、大きな富をもたらしました。しかし、良い時期は長続きせず、安価な外国産木材に押され、現在は古橋家の山林だけでなく日本中の山林が「お荷物資産」となっています。

全国的にも稀有な豊田市の森づくり事業

2000年の東海豪雨がきっかけとなって、豊田市では間伐の促進と、そのための山林の境界確定・団地化を推進しています。水道料金に水源保全基金を上乗せて、豊田市全域の山林の境界確定や間伐手遅れ林の対応にメドがたちつつあります。



周辺の山主とともに杭を背負って境界確定作業

公益的機能を尊重しつつ、 徹底的にデジタル化

山林は、水源を涵養したり、洪水や土砂災害を防止したり、二酸化炭素を吸収したりなど、公益的機能が多々あります。こうした機能を尊重するには、木材生産に向かないエリアをあらかじめゾーニングする必要があります。現行の保安林のような筆単位ではなく、ドローンやレーザー測量、AIを駆使して、地形や地質などを判別し、より精緻にゾーニングする必要があります。

その上で、山に生えている木を1本ずつデジタル管理してデータベースにしなければいけません。バイオプラスチックや木質高層建築など、新たな需要も生まれつつあり、さらには二酸化炭素排出権取引でも山林は重要な役割を期待されています。

こうした新しい林業は、2050年頃にやっと実現されてくると考えています。その頃には、古橋家の山にある樹齢150年の巨木を、Amazonで買い物するようにWebでポチっとすることで、気軽に自宅の家具や内装に使っていただけたと思います。

(一般財団法人古橋会 常務理事 古橋真人)